

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



旧環境林センターの管理棟は資材置き場等として利用されている。中庭のシダレニレもそのまま。(P4～5)

Contents

- 2015年 年頭のごあいさつ P 2
- 植物園に生まれ変わった旧センター P 4～5
- 2015 黄土高原ワーキングツアー参加者募集 P 5
- 第2回黄金崎の松・再生プロジェクト参加者募集 P 6

2015.1
161

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

2015 年 年頭のごあいさつ

長年にわたる緑化事業への支援に感謝

武春珍（緑色地球ネットワーク大同事務所）



尊敬する GEN 会員のみなさま

1 年が過ぎ去り新しい年を迎えるにあたって、GEN 会員のみなさまならびに日ごろ黄土高原緑化協力活動を支持してくださっている方がたに対し、緑色地球ネットワーク大同事務所を代表して、また個人としても心からの祝福と深い感謝の意を申し上げます。

新年を迎え、黄土高原緑化協力活動も 24 年目を迎えます。この 23 年間、わたしたちはこの緑化事業のために高見邦雄さん、前中久行先生ほかたくさんの方の日本の友人とともに奮闘してきました。23 年のあいだ、真摯に手を取り合い、密接に協力し、慎重に木を植え続け、苦労を共にし、共同の緑化活動をゼロからかたちあるものへと作り上げてきました。

そして緑化の規模を拡大し、双方の政府と民間交流を促進した結果、この事業はいまでは双方の政府と民間の交流、協力を促進する新しい力となっています。

現在までに 6,000 ヘクタール近くの土地に木を植え森を作り、地球環境林を 200 カ所近く建設しました。小学校希望果樹園の数は 50 カ所以上になります。植えた当初小さかった苗は、天高く大樹へと成長しました。希望果樹園でもすでに多くの成果をあげています。

また、『人民日報』、『中央電視台』などのメディアおよび日本の朝日新聞、フジテレビ、NHK などの報道機関がわたしたちの緑化協力をとりあげ、高く評価しました。さらに、高見さんは

2001 年 10 月に中国国務院より『国家友誼賞』を授与されています。

このことはわたしたちの黄土高原の緑化協力の実践は大変意義の深い偉大な事業であることを再度証明するものです。

生態環境を守ることは全人類の幸福のための事業です。これ

は世界各国の人びとの共同の責任であり、多くの人の努力が必要とされます。

わたしたちの努力はすでに大きな成功を収めていますが、黄土高原の気候は依然として劣悪であり、「植樹 3 割、管理 7 割」の緑化を実現するわれわれの緑化事業の道のりはいまだ遠く険し

く、辛いものです。さらに多くの有識者による絶え間ない努力が必要とされます。

この新しい 1 年も、わたしたちはともに協力してこの困難であっても有意義な道を進んでいきたいと思います。わたしはみなさんの協力と努力によって黄土高原の荒地が緑豊かな土地に変わる夢は必ず実現すると確信しています。

わたしたちの緑化協力事業が健やかに発展することを心より祈念いたします。

また、新しい 1 年が健やかで順風満帆に過ぎますよう、心よりお祈り申し上げます。

報告

多彩な参加者が集った合同研究会

宮下 利江（GEN 会員）

11 月 29 日、GEN と中国環境問題研究会の合同研究会『日中環境協力について語り、考える』が立教大学池袋キャンパスでおこなわれました。

11 月 29 日に開催された中国環境問題研究会と GEN の合同研究会は 30 名を超える参加者が集まりました。特筆すべきは、住んでいる地域、専門分野、普段の活動、職業、年齢、国籍が異なる多彩な顔ぶれが揃ったことです。

GEN から、高見さんと上田さんによる現地、国内での活動報告。今回の合同研究会の仕掛け人、松永さんの大同での調査報告。中国環境問題研究会の大塚健司さんが河南省の水質汚染の問題とその取り組み、相川泰さんが北京・天津の環境 NGO の活動について報告を行いました。その後、参加者全員の自己紹介が行われましたが、単なる自己紹介に留まらないところがこの会の意義あるところ（すごさ！）だと思います。

例えば、高見さんがアンズを植えることで村が変わっていく経緯を活動の

視点で話し、松永さんがそれを空から俯瞰する鳥のような捉え方で地形と数値を踏まえアンズの村を見る。それを受け、日本に住んでいる中国人の参加者から「小学生の頃、学校でアンズの種を集めて農村に送るという取り組みがあって、ノルマが種 1kg だったんですよね。どれだけアンズ食べたことか。」という話がでてくる。それを聞いていた一回り年が下の中国人留学生は、研究テーマとして GEN の活動に注目しているという。

このアンズの村の例のようにひとつのテーマを異なる立場、視点から捉えてそれをセッションすることで、火花が散り溶接されて細い線がつながった。そして、常にその線は動いている。そんな体験が幾度もできた刺激ある会でした。

報告

宇久須で感じた「オスソワケ」精神

黒田 豊彦（立教セカンドステージ大学本科生）

11 月 1 日～3 日、西伊豆収穫合宿がおこなわれ、9 名が参加しました。野菜の収穫のほか、地域のお祭りなど伊豆の伝統文化にもふれる合宿となりました。

今夜、かぼちゃのスープが登場した。格別に美味だ。調理されたのは、自分で春に種を蒔き秋に収穫をした「まんじろう」という品種だ。全長 30cm の食材を、宇久須の GEN 耕作地から持ち帰った。関係者にもお裾分けと称して、他の作物と共に発送された。「オスソワケ」って、何て優しい響きだろう。合宿はその精神に満ちていた。秋の参加者は 5 名。途中 4 名のご家族の合流を得て、収穫後の昼食は賑わった。採れたての海老芋は、いも煮として供された。子供達は、汁と白米を何度もお代わりし、「おいしいねえ」の声を連発した。大勢で食卓を囲む雰囲気、食欲を一層かき立てたに違いない。その昔、農業を営む大家族の祖父の家で過ごしたときも、同じような時間が流れ、子供だった私の目は輝いていたことだろう。

いつもながら合宿は、多岐にわたる

献立に彩られていた。なかでも貴重な体験は、黄金崎での松林保全に向けた松ぼっくり収集と並んで、柴地区の秋祭に居合わせたことだ。宵宮の日の夕刻、氏神である出崎神社の直会に招待され、氏子の方々と、伝統料理をつまみながらの酒宴に臨んだ。GEN の S 氏が自己紹介のあと、町の豊富な森林資源の活用について所見を述べると、町の有力者たちが興味を示し、話題が宴席を飾った。これに先立ち、小さな祠で代々伝わるお歌が奉納された。抑揚を押さえた「初春」と「目出度」が流れ、突然の雷雨が境内を洗う。古来より漁村を見守り続けた神様の存在を身近に感じる瞬間だった。

翌朝、3 時半に起床し、県の無形文化財に指定されている人形三番叟を、牛越神社で観た。一体の人形を 3 人で操り、背後に 6 人の鼓笛演者が控える。文楽のような語りはほとんど



どなく、人形遣いが時折「ハ、イヤハ、ヨイエンヤ」と聞こえる掛け声を発する。神様が社にお戻りになる明け方に演目は終了し、我々は余韻を抱えて合宿所に帰った。誰かが、「スケジュールも残り少なくなっちゃたなア」と寂しそうに呟いた。

合宿所はこれから、まるで北アルプスの山小屋のように、暫く冬籠りに入る。来年の春の再会を約して、みなはそれぞれ家路についた。



報告

初谷溪谷で冬の炭焼きを楽しみました

12 月 6 日、GEN 自然と親しむ会で無煙炭化器を使った炭焼き in 初谷溪谷をおこないました。16 名が参加し、炭焼やバーベキューを楽しみました。

12 月 6 日、初谷溪谷にて GEN 自然と親しむ会の冬の恒例となった無煙炭化器を使った炭焼きをおこないました。



10 時に妙見口駅に集合し、途中の景色を楽しみつつ初谷溪谷へ到着。自家用車組と合流し、小寺さんから炭のお話を聞いたあと、さっそく炭焼き開始です。

無煙炭化器は庭木の剪定枝を簡単に炭にでき、寒い日は暖も取れて焼き芋やバーベキューも楽しめる優れものです。寒い季節に火にあたるとあたたかく、燃えさかる炎を見るのはなぜか飽きることなく、いくらでもじっと眺め

ていられるのが不思議です。過去に何回か経験したことのある炭焼きですが、毎回飽きずに楽しく火を囲んでいます。

今回は炭焼きのほかに、豚汁つくりとオイル缶かまどを使った釜炊きご飯にも挑戦しました。

オイル缶かまどは無煙炭化器同様に、シンプルな作りながらもごうごうと音を立てて効率よく薪を燃やし、あっという間においしいごはんができあがりました。炊飯器で炊いたごはんより断然おいしかったです。

炭焼きがひと段落してさくさく枯葉を踏みながら溪谷を歩いていると、かわいらしい祠やシカの角、川で泳ぐ魚などの出会いがありました。

冬の自然をおおいに満喫できた 1 日となりました。（河本）

植物園に生まれ変わった旧環境林センター

高見 邦雄（GEN 事務局長）



15年にわたって大同における私たちの協力拠点であった旧環境林センターが口泉植物園に生まれ変わっています（口泉は地名）。昨年12月に前中代表と高見が訪れました。

旧環境林センターは立花吉茂前代表の構想で生まれました。1995年4月、阪神大震災の直後に起工式をもち、3.5haの小ぶりのスタートでした。地元の人たちが熱心に取り組み、2000年には20haまで拡張して、技術改善などに大きく役立ちました。

2010年にお別れの日がきました。大同市が植物園を建設することになり、この土地が収用されることになったのです。当時の耿彦波市長は「樹木がよく育っているのをみて、ここに決めました」と話しました。西側にあった砒区苗圃、東にあった石炭企業の園林処をあわせて67haまで拡張されたのです。市長はその見返りに20ha余りの土地の

無償提供を約束してくれました（現緑の地球環境センター）。

しかし、そのときはほんとに口惜しかったのです。大同事務所の武春珍所長はいまでも「行きたくない!」と言っています。「どうせ入れないよ」と言われましたが、行くだけ行ってみました。

敷地の南端を東西に幅員56mの道路が横切りました。その道に面して南に正門があります。そこから北に伸びる道路は以前と同じ場所で、いくらか拡張され、きれいに舗装されています。あちこちにオブジェやベンチが置かれ、市民の憩いの場になっています。零下8度の寒さでしたが、太極拳や散歩を楽しむ姿がありました。

管理棟はそのままの形でありました。作業員の休憩所になり、資材の保管場所にもなっています。中庭に4本植えられていた枝垂れニレはさらに大きくなって元気でした！井戸と水道塔も



以前のままです。

私たちが育てていた樹木苗の大部分が園内のどこかに植えられたようです。ポプラの見本林はずっと大きくなって



います。トネリコやイブキ、ヤナギも以前の場所で若い林に育っています。

以前はどこになにを植えるときでも、直線上に1本ずつ植える芸のないやりかたでしたか、寄せ植えをはじめ、いろんな植えかたが試みられ、垢抜けたものになっています。街路灯はソーラー式で電線がなくすっきりしています。立派なものだと思います。総工費は1億6千万円だそうで、日本円にすると30億円超。

中心部の道路が以前と同一の場所にありますので、あちこちで思い出を蘇



らせることができます。ツアーの機会に訪れてもらえば、以前の参加者には喜んでもらえるでしょう。（高見邦雄）



参加者
募集

2015 黄土高原ワーキングツアー

今年もワーキングツアーを行ないます。運がよければアンズのお花見が楽しめるかも。春の大同を楽しむ旅、ぜひご参加ください。

○日程：2015年4月11日（土）～17日（金）6泊7日

○訪問地：中国山西省大同市

○費用：187,000円（学生割引30,000円あり）（国際航空運賃、空港使用料、燃油特別付加運賃、航空保険料、中国国内の交通費／食費

／宿泊費を含む。GEN年会費〈一般12,000円、学生3,000円〉、旅券取得費用、個人でかける旅行保険料、個人行動時の費用は含まない）

※関西空港発着。東京発着便利用希望のかた、北京で合流希望のかたはご相談ください。

○定員：30名程度

○最少催行人員：10名

○申込み期限：2015年3月4日（水）

○参加ご希望のかたはGEN事務所まで



ご連絡ください。資料は（株）マイチケットより発送します。

参加者
募集

第2回 黄金崎の松・再生プロジェクト

昨年に GEN 顧問の小川眞さん（白砂青松の会会長）の指導のもとでおこなわれたマツの再生プロジェクトを今年もおこないます。

昨年も協力し、大活躍していた NPO 法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）から、今年も 100 名を超える学生ボランティアが参加の予定です。GEN 会員のかたの参加も大歓迎です。西伊豆の自然を満喫しましょう。

- 日程：2月19日（木）13時ごろ～2月22日（日）13時30分ごろ
※現地集合、現地解散。途中参加、途中離脱、後泊も可能です。事前にご相談ください。
○場所：静岡県賀茂郡西伊豆町
○アクセス：東京方面から
①高速バス（新宿－修善寺）＋路線バ
- ス約 7,800 円
②JR 東海道線（東京－三島）＋伊豆箱根鉄道＋路線バス約 8,800 円
③自家用車（東名沼津インターチェンジから 1 時間半）駐車料金不要
中部、関西方面からは清水－土肥のフェリーを利用する方法もあります。
○主催：宇久須まちづくり協議会・



国際ボランティア学生協会（IVUSA）後援：緑の地球ネットワーク（GEN）
○活動内容（変更の可能性があります）
2月19日（木）13時ごろ 宇久須・柴公民館に集合 14 時～プレゼン「炭と菌根菌を松の再生に生かす」15 時～17 時 黄金崎の松林の林床の片付け・炭の材料集め



2月20日（金）第1班①黄金崎下の駐車場や第1再生休耕田にて無煙炭化器を使った炭焼き②切断した松が玉切りしてあればその片付け③林床の整備 第2班 西伊豆活性化協議会「千年の森」での活動

2月21日（土）9時～「第2回黄金崎の松・再生プロジェクト」

2月22日（日）10時 交流会 場所未定 13時30分解散

IVUSA の学生と一緒に公民館での宿泊をご希望の方は寝袋をご持参ください。民宿等の利用も可能です。

駐車は何台でもできます。
くわしくは下記までお問い合わせ下さい。

○問合せ・申込み：藤原國雄さん（宇久須まちづくり協議会スローライフ部会長）tel. 0558-55-0530 e-mai : inakamono920@gmail.com

黄土高原史話<71>

あえて愚見を呈すれば

谷口 義介（GEN 会員）

2001 年 5 月、本誌編集者の依頼をうけ、軽い気持ちでスタートしたこのシリーズ。数回程度のもりが、今回でなんと 71 回！ ついに筆者の年齢と並んだ次第。すでに次回分も出来上がっている、年齢を追い越すことは確実です。

何度かスタディ・ツアー（以前はワーキング・ツアー）にご一緒した福岡の石田和久氏は、いま 83 歳。昨年（2014）夏は 20 回目のご参加とか。ボクもまだまだ頑張らなくっちゃ！

さて、今回は桑乾河の名前のルーツ。

もともと「桑乾」という語は、はじめは河川名ではなく、県名として登場する。班固（32～92）の『漢書』地理志（下）に、代郡（大同県の東）の下に置かれた 18 の県の一つとして見えている。同じく代郡の管轄下にあった平舒郡（今の山西省広靈県）の条下に、祁夷水（今の壺流河）は北に流れて「桑乾」に至って「沽水」（正しくは治水、つまり桑乾河）に入ると見えるから、前漢時代の「桑乾県」は今でいうと河北省の北西部、山西省との境界に存した。



そこで問題は、この「桑乾」という名の起源である。

司馬遷（前 145？～前 86？）の『史記』貨食列伝に、

燕と代は田・畜して、しかして蚕を事とす。

とあるから、河北～山西の一带は狩猟・牧畜のほか養蚕も盛んで、そのための桑

林も多かったようだ。また、河北省張家口の南を流れる洋河（本シリーズ<69>に既出）は、酈道元（469？～527）の『水経注』巻 13 によると于延水と呼ばれていたが、

水の側に桑林あり、

故に時人またこの水を謂ひて叢桑河と為す。これすなわち北土に桑寡なく、ここに至ってこれを見る。因りて以って名づく。

と見える。つまり「北土」、今の内モンゴル自治区には少なかった桑の木は、山脈を南に越えて河北省に入ると、群生するのが見られるようになるという。桑乾の「桑」は、そのまま植物の桑と考えてよいだろう。

一方、「乾」については解釈がむづかしいが、あえて愚見を呈してみたい。「乾」は「かわく」という意味だから、「桑乾」とは“桑の実の乾かしたもの”、つまり干し葡萄ならぬ“干し桑の実”とは解せないか。酈道元と同じく北魏の人・賈之勰（？～？）の農業書『齊民要術』巻 5 に、

樅（くわのみ）が熟したら、たくさん採って日に曝して乾燥させておくと、凶年で粟米に不足したとき、食用にあてることができる。（天野元之助『中国農業史研究<増補版> 149 ページ』）

とある。すなわち、“乾燥させた桑の実”から「桑乾」という地名がついた、とみたい。いかがであろうか。

それはともかく、前漢時代に桑乾県が設置されたころ、すぐ近くを「治水」が流れていたが、後漢になると「瀑水」という呼び方も現われ、北魏のころはこの二つが併用されていた。ところが『水経注』には、その上流に「桑乾水」という名が初出してくる。この桑乾水が「索干」なる部族名にもとづく「潦洎水」から起ったことは、前回述べたように『光緒山西通志』巻 43 の論ずる通りだろう。そして『通志』は、

その音皆に桑乾に近し。しかして遂に漢県の名と相ひ混じ、沿ひて今に至るも改められず。

つまり、上流の「潦洎水」→「桑乾水」と前漢「桑乾県」とはもともと名の由来を異にしていたが、のち河川名として桑乾河に統一されるようになった、というのだ。この説に賛同したい。

では、桑の実が熟す初夏のころ河が干上がるので桑乾河という名がついた、という定説（俗説）についてはどうか。

- 解散：地下鉄中央線「朝潮橋」駅
○案内：宮本敏幸さん（大阪市港区在住、GEN 世話人）
○持ち物：弁当、飲み物、敷物、ハイキングできる服装・靴、雨具
○参加費：700 円
○定員：20 名
○申込み：4 月 1 日（水）までに GEN 事務所へご連絡ください。



参加者
募集

GEN 自然と親しむ会

有馬富士公園ハイキング

三田市にある兵庫県立有馬富士公園で、冬の自然観察を楽しみませんか。公園内にある標高 374m の有馬富士の登山を楽しむほか、野鳥が集う福島大池やかやぶき民家などを見て回ります。

- 日程：2月28日（土）10時～15時ごろ
○場所：有馬富士公園
○集合：JR 福知山線「新三田駅」に 10 時
○持ち物：弁当、飲み物、敷物、ハ
- イキングできる服装・靴、雨具
○参加費：700 円
○定員：20 名
○申込み：2月25日（水）までに GEN 事務所へ



GEN 自然と親しむ会

渡し船で巡る 大阪港とサクラ

4 月のお花見シーズン、今年は大阪港の周辺でのお花見を楽しんでみませんか。

大阪市港区を歩きながら、渡し船に乗ったり、日本一低い天保山に登ったりと、港区ならではのお花見散歩を楽しめます。

○日程：4 月 4 日（土）10 時～15 時ごろ

○場所：大阪市港区周辺

○集合：10 時に JR 桜島線「桜島」駅

情報ひろば いっしょなかたち

自然大学 20 周年記念公開シンポジウム
NPO 法人自然と緑～里山から考える
物質循環の基本となる里山を見直そう！

自然大学 20 周年を記念してのシン
ポジウムです。

○日時：2 月 1 日（日）12 時 45 分～
17 時

○場所：アネックス・パル法円坂 A
棟 7 階なにわのみやホール

○〔プログラム〕基調講演：松谷茂
さん「ぐるっと、里山考」－なぜ今
里山なのか－／講演：前佐古ゆりさ
さん「里山と植物」、小川真さん「里
山と土」、川那部浩哉さん「里山と
水」、渡辺弘之さん「熱帯の里山」
／パネルディスカッション コー
ディネーター只木良也さん
閉会後懇親会（会費 4,000 円）を予
定しています。

○参加費：無料

○主催・申込み：氏名、住所、電話番号、
懇親会の出欠を明記の上、fax か
メールで次までお申し込みください。
NPO 法人自然と緑 〒537-0025

* 当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。
主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

* 当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月 15 日ごろの発行で、締切は前月の末です。
なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

大 阪 市 東 成 区 中 道 3-2-34 tel.
06-6978-5060 fax. 06-6978-5061
e-mail : sizen_mi@osb.att.ne.jp

第 22 回

ワン・ワールド・フェスティバル 世界につながる国際協力のお祭り

西日本最大の国際協力・交流のお祭
りです。今年の会場は扇町公園です。

○日時：2 月 7 日（土）～2 月 8 日（日）
10 時～17 時

○場所：関テレ扇町スクエア（1 階アト
リウム、3 階メビック扇町）北区民セ
ンター 扇町公園（地下鉄「扇町」
駅直結、JR 環状線天満駅徒歩 3 分）

○入場無料・雨天決行

○主催・問合せ：ワン・ワールド・フェ
スティバル実行委員会事務局（（特
活）関西国際交流団体協議会内）
〒540-0026 大阪市中央区本町 1-4-12
piaNPO2 階 tel. 06-6944-0407 fax.
06-6944-0408 e-mail : onefes@
interpeople.or.jp URL : http://
www.interpeople.or.jp/owl

第 18 回

六甲奨学金基金のための古本市

六甲奨学金は、兵庫県下の留学生・
就学生への奨学金や日本語ボランティ
ア教室を支えています。古本市は基金
の募金活動の一環です。

○受付期間：3 月 1 日～3 月 31 日まで

○送付方法：直接持参または送料送り
主負担で送付

【注意】

- ・汚れのひどいものは不可
- ・辞書、新しい本大歓迎。絵本、マンガ、
洋書可
- ・雑誌、教科書、参考書、コンピュー
ター解説書、文学全集、百科事典な
どは不可
- ・CD も集めます（ビデオ、TV 番組を
録画した DVD やコピー CD は不可）
- 送り先・問合せ先：神戸学生青年セ
ンター古本市係（〒657-0064 神戸市
灘区山田町 3-1-1 tel.078-851-2760
fax.078-821-5878 e-mail : info@ksyc.
jp URL http://ksyc.jp/）